青森県立高等学校将来構想検討会議　中南地区部会（第２回）概要

日時：平成２６年１２月２４日（水）
１３：００～１５：２０
場所：　弘前工業高等学校

＜出席者＞
中南地区部会委員
古山　哲司 地区部会長、佐々木　健 地区部会副会長、木村　浩哉 委員、
清野　眞由美 委員、豊島　隆幸 委員

１　開会

〇西谷室長から、挨拶があった。
〇事務局から委員を紹介した。

２　調査検討

（１）地区部会の検討の進め方について

事務局から、資料２、資料３をもとに地区部会の位置付け、今後の地区部会等の開催計画、当日の検討の進め方について説明した。

（２）本県における高等学校教育改革の取組状況等について

事務局から資料４「高等学校教育改革の取組状況等」、資料５「各地区の高等学校の状況等」、資料５附属資料「青森県基本計画『未来を変える挑戦』中南地域」、資料６「高等学校教育に関する意識調査等（速報）」について説明した。

（３）学校・学科の在り方について

①　「地区の目指す学校・学科の在り方」についての意見交換

地区部会長から、将来の望ましい教育環境（どういう学校や学科が必要なのか）について、新たな視点からの意見を求めた。

委員から次のような意見があった。

〇　資料５の１３ページにあるとおり、中南地区は職業教育を主とする専門学科の割合が高くなっている。平成２７年度からは岩木高校が募集停止となり、私立高校との兼ね合いもあると思うが、普通科が学級減となるのは非常に残念である。将来の中南地区を考えたときに、普通科を減らすのは避けていただきたい。

学級数を減らすということは、教員数の減につながることだと思うので、現在は４０人学級であるが、３５人学級とすることについても県独自で検討していただきたい。

資料５の４ページに学級数をブロックで表示しているが、私立高校の学級数は

分かるか。県立高校と私立高校の学級数を比較すれば、検討の参考になると思う。

普通高校を減らすことは避けたい。生徒数が減少する中、学級数を減らすのではなく、１学級の人数を減らすことにより少人数指導の充実を図るべきである。

→（事務局）私立高校の学級数は手元に資料がないが、中南地区の私立高校について、現在ある情報をお知らせする。平成２７年度の募集人員について、東奥義塾高校が４０５人、弘前学院聖愛高校が３２０人、柴田女子高校が２１０人、弘前東高校が２８０人、地区トータルで１，２１５人募集という状況である。

３５人学級については、公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律により、学校の定員の標準は４０人となっているところであるが、青森県は農業・工業・水産等の学級規模を３５人としている。また、３学級以下の高校についても３５人学級を導入している。全国と比較して、青森県は４０人未満の学級の割合が高い県となっている。

また、小・中学校では、学級数により教員数が決まるが、高校の場合は、学級数ではなく、あくまでも募集人数により教員数が決まる制度となっている。

○　中南地区の私立高校は普通科が多いということか。

→（事務局）中南地区の私立高校は普通科が多い傾向がある。

○　生徒数減少に対応して県立高校を学級減していくだけではなく、私立高校にも相応の負担をしてもらうことになるか。

→（事務局）県立高校と私立高校は設置者が異なるため、県教育委員会から私立高校設置者に対して学級減を求めることはできないが、県立高校・私立高校は共に中学校卒業者数に応じた募集をしている。私立側も、毎年というわけではないが、全体として募集人員は削減してきている。

○　青森県内で国立大学が設置されているのは中南地区だけである。弘前大学への進学率を上げるためにも、普通科の学級数は維持しなければならない。

中南地区の専門学科の割合が高いという話があったが、生徒数が減少していく中、専門高校の学科も精査していかなければならない。

○　中南地区で普通科が少ないという問題は以前からあった。選択肢が限られている地区ということが今も続いている。平成２７年度から弘前高校が１学級減となることを踏まえると、将来的な進路が未決定の中学生にとっては益々ハードルが高くなっている。普通科は学級減しないでほしい。

また、中南地区は農業・観光に力を入れているので、そのような人財の育成が必要になる。意識調査では、高校生に身に付けてほしい能力として「進学に必要な学力」の次に「思いやりの心やコミュニケーション能力を含めた人間関係」とあり、これはどこに行っても必要となる。大学の先生からは、コミュニケーション能力が不足している大学生がすごく増えているという話を聞く。

今後の進むべき方向性にも記載されているが、本来は社会教育や家庭教育が担うようなことも学校教育で担っていかなければ、将来地域を支える人財の育成は

難しいと思う。

○　多くの高校生や大学生が地元で取り組める産業があると、黒石の街も活気が出ると思う。
○　黒石高校看護科の生徒は、卒業後５割から６割が青森県内に就職する。ただし、関東方面に就職した生徒に話を聞くと、大きな病院に勤め、力を付けて、いずれは地元に戻りたいとのことだった。北東北の公立高校では唯一の看護師養成施設であることから、黒石高校看護科の重要性は高いと思う。

○　１０年先、２０年先を見据えると、学校の中だけの教育ではなく、人間を育てるという意味で社会・地域とつながりをもつ学校にしていかなければならない。
○　地域とつながりがあると、地元を大切にする生徒に育つ。生徒から最初に就職先の希望を聞くと、７割弱は地元を希望している。これは、コミュニティなどとの関わりを通して育まれているのだと感じている。

○　かつては幼少期から地域の中で行事などを通して人間関係を学んできたが、今はつながりが希薄となっている。高校には、先輩や年上の人たちとの関わり方を学ぶことができるような取組を増やしていくことが必要になってきている。

②　資料７「１　学校・学科の在り方に関する基本的な考え方」から「２（３）総合学科の基本的な方向性」までについて

事務局から資料７「１　学校・学科の在り方に関する基本的な考え方」から「２（３）総合学科の基本的な方向性」までの説明があった。

委員から次のような意見があった。
○　弘前市内の普通科は維持してほしいということが切実な願いである。弘前高校、弘前中央高校、弘前南高校はいずれも進学校であるが、目指すものが違う。これからは各校の特色を生かして、例えば、弘前高校はメディカルコースや政治に関わる者など、さらに上を目指す生徒を青森高校や八戸高校と連携して育ててほしい。弘前中央高校、弘前南高校もそれぞれ特徴を出して、コース制を導入したり、理数教育の拠点校などとすることも必要であると思う。

○　現実問題として、普通高校が弘前高校、弘前中央高校、弘前南高校しかなくなると、力量がありながら弘前高校への入学が難しい子どもたちはどこに行くのか。弘前中央高校への入学が難しいということで、弘前工業高校、弘前実業高校へ行くという現実もあるわけだが、果たして弘前工業高校や弘前実業高校が好きで行くのか。弘前高校、弘前中央高校、弘前南高校の３校に入れなければ私立に行くしかないという図式ができている。本当は普通高校も子どもの力量に合わせた配

置がされていれば一番いいと思う。平成２７年度に弘前高校が１学級減になるが、これは弘前高校だけの問題ではなくて、いろいろ大きい意味がある。

○　黒石高校は、弘前市内の普通高校に進学することが難しい生徒が比較的多く入学しているという現実がある。黒石市内の生徒が弘前市の高校に進学せず、黒石市内の高校に進学しても、大学進学を保障できる学習指導が必要である。来年度から７校時も実施予定としているが、弘前市内の普通高校との区別化を図りながら、中学生にとって魅力ある普通科にする必要がある。

○　学校教育の課題は、何十年も変わっていない印象を受ける。偏差値により高校を選択するという現実はあるが、普通高校だけが高校というわけではない。工業高校や商業高校を卒業した生徒も大学進学が多くなってきており、自分が将来どういう道に進みたいのかというキャリア教育が必要となる。今後、専門高校には、入学する生徒・保護者に理解してもらうことがより必要となると思う。

○　工業高校から大学へ進学する場合は、推薦入試によることが多く、センター試験を受けて４年制大学を目指す生徒はほとんどいない。工業高校の場合には、基礎基本をしっかりと身に付け、専門科目のレベルを上げる指導をしている。専門の力を蓄えて弘前大学の工学部等に進学している。工業高校から大学進学も増えてきているが、あくまで工学系に限られる。

○　弘前工業高校では、各々学科があって、それぞれ必履修科目がある。必履修科目の量が多く、３年生になると３分の２は専門科目をとらないと、学科として卒業を認められない。進学希望者には、数学Ⅲや理科の選択科目を２科目程度とるよう指導しているが、現在のカリキュラムでは、弘前実業高校のような総合選択制を導入することは難しい。進学は増えてきているので、何らかの工夫は必要である。

○　弘前市においても地元の建設業界への就職が少ない。弘前地域に技術者として残れるような生徒を育てていきたい。工業高校は県外に人財を輩出しているイメージがあるが、実際は青森県に残って地元のために働いてほしい生徒はたくさんいる。地元の求人が不安定な状況にあるため、安定した県外に出て行く生徒が多い。県外就職からＵターンした場合に、その技術を生かす場がないことを残念に思う。

○　県内の就職先がないため、県外就職するということは、商業高校でも同じ状況だと思う。

○　中南地区の商業科については、これまでも弘前実業高校、黒石商業高校の２校が共存してきており、八戸商業高校と三沢商業高校のようにそれぞれが地域に根

ざしていると思う。ただし、これからの生徒急減期を考えると難しい。

○　中学生の進路志望調査では、普通科希望が圧倒的に多い。中南地区では、普通高校に入れないため専門高校に入った生徒が他地区より多いのではないかと思う。普通科と専門学科のバランスを考えていかなければならない。

○　弘前工業高校を卒業して、工業に関係しない専門学校等へ進学する者は、毎年１０人未満である。最近は介護系の専門学校への進学者が増えているが、卒業生全体からみれば多くはない。就職についても、学科により差があり、特にインテリア科等では、専門性を生かせない場合もある。

○　専門高校は、それぞれの専門性があると思うが、その力は直接関連する就職先のみに生きるスキルではなく、全ての就職先で生きるスキルである。そのことを中学生にも理解してもらえるよう発信していかなければならない。

　行政でも高校生力を欲している。ＮＰＯでも期待している。高校生の力を地域でも発揮してもらって、自分たちにはいろいろな選択肢があることを知ってもらうことで、就職先でも力を付けられるのではないか。

③　資料７「３　定時制課程」「４　通信制課程」について

　事務局から資料７「３　定時制課程」「４　通信制課程」についての説明があった。

委員から次のような意見があった。

○　弘前市から定時制普通科がなくなったことについては、今でも反対している。弘前市内から尾上総合高校の夜間部（Ⅲ部）に電車通学する場合、帰宅は１０時過ぎになる。女子は特に心配である。ただし、進んで尾上総合高校に進学した生徒もおり、Ⅰ部・Ⅱ部については、他部履修により３年間で卒業する生徒もいる。また、発達障害の生徒等の受け皿にもなっていると感じている。

　弘前工業高校の定時制については、女子はどうしても敬遠するし、発達障害の生徒には、実習の不安があると思う。

　定時制については、いろいろと検討していかなければならない。

○　青森工業高校と八戸工業高校の定時制では生徒数が減少しているが、弘前工業高校の定時制では減っていない。しかし、工業科では作業を伴うことから、普通科とすることを含め、在り方を検討しなければならない。

○　弘前中央高校と黒石高校の定時制課程の募集停止については、数年様子を見ないと影響が分からないのではないか。

○　三市のある地区に定時制・通信制課程の拠点校ができたことは、学びたい生徒にとってとても良いことと感じている。

○　通信制には、より多くの事情を抱える生徒の受け皿となってほしい。様々な事情により、定時制にも入学できず、通信制にも入学できないこともある。生徒誰もが継続して学ぶことができる学校として、通信制の在り方を考えてもらいたい。

○　生徒が学びたいと思った時に学べる場所、機会は絶対に残しておかなければならない。一方で、高校は誰でも受け入れるということとは違う面もあるので、その折り合いをうまくつけてやっていってほしい。

④　資料７「５　学科構成等について」について

事務局から資料７「５　学科構成等について」についての説明があった。

委員から次のような意見があった。

○　中南地区にも観光に関する学科があっても良い。十和田のバラ焼きは、高校生が加わったということで地域の活性化につながったと思う。

弘前市・黒石市は町歩きが魅力の地域である。１０年、２０年先を見据えると、地域の郷土愛や観光が就職先にもつながる。社会人になったとき、何らかの形で観光に関われる人財育成ができる。

→（事務局）十和田西高校のバラ焼きの取組は、観光科としてのものではなく、ボランティア活動によるものである。観光科の取組としては、十和田湖の観光ボランティアなどがある。

○　各校が７校時を設定してきており、理数科、英語科・外国語科は普通科のカリキュラムの中でも対応できることから、個人的には不要だと思う。

スポーツ科学科、表現科は専門科目２５単位の設定の仕方として、学科である必要があると思う。その理由としては、スポーツ科学科については、２０２０年の東京オリンピック、２０２５年の開催が考えられる青森国体、誘致に乗り出した札幌オリンピックがある。さらに、スポーツには支えるスポーツ、見るスポーツもあり、健康維持により青森県では短命県返上につながるのではないかと思う。表現科については、科の目標としてコミュニケーション能力と創造力を挙げているが、これらは次の学習指導要領にかなり出てくるものと考えられる。現在の学習指導要領には表現力という言葉が出ており、表現科は先々を考えている。

中南地区を考えたとき、普通科が少ないことを踏まえると、商業教育を主とする専門高校を統合しないと生徒急減期には対応できないと考えている。

⑤　資料７「６　縦の連携・横の連携について」について

事務局から資料７「６　縦の連携・横の連携について」についての説明があった。

委員から次のような意見があった。

○　三本木高校附属中学校は成果が上がっており、魅力は感じるが、弘前市は弘前大学附属中学校があり、ある程度の子どもたちが選抜されて市立中学校以外の学校に進むことで、市立中学校の現場の意識の低下が懸念される。

○　弘前市では、現在、市立の小・中学校について統合や学区再編などを含めて検討中で、その中の検討事項に小中一貫は入っているが、実施までには至っていない。

⑥　資料７「７　その他」「８　第２分科会での検討における留意事項」について

事務局から資料７「７　その他」「８　第２分科会での検討における留意事項」についての説明があった。

地区部会長が、全体を通して意見を求めた。

委員から次のような意見があった。

○　たくさんの資料をいただいているが、しっかり読み込んで会議に臨みたいので、早めに資料を送付してほしい。

○　中南地区を考えたときに、普通科はこれ以上減らさないでほしい。生徒が減少する中、皆が輝けるような人づくりのため、専門高校の充実も図られるとよい。中南地区は農業が盛んな地域であり、６次産業化のために農業も法人化されている。２０３０年の青森県の目指す姿にも農業に関することが書かれている。
　マーケティングや経理のことも分かり、どんどん農業で自営ができる人財を育成する農業教育にも力を入れてほしい。

○　大事なことは、地域を主体的に考えていること。普通高校の学級減が厳しい中、工業高校、商業高校、農業高校も地域全体の方向性を見極めて検討していかなければならない。１つの学校だけを考えるのではなく、地域・県全体を見ていく必要があると考えている。

○　普通科の募集定員割合について、青森市、弘前市、八戸市を含む地域間で比較すると、中南地区がもっとも低い。普通科の定員減は避け、職業教育を主とする専門学科を地域の産業構造を考慮しながら再編成することにより、対応すること

が妥当と考える。

　地区部会長が、今後、次期計画を策定していく中で、地域の方々から意見を聞く上で、どの時期が効果的か、意見を求めた。

委員から次のような意見があった。

○　市町村の意見聴取については、できるだけ早く機会を設けてほしい。中間まとめ前の平成２７年６月の第２分科会（第４回）の後に、市町村長の意見聴取をしてほしい。

→（事務局）中間まとめの前となると、資料を提示することもできないため、高校教育改革全般に対して意見をいただくことになるが、よろしいか。

○　そういった形でよい。

　本日の会議で出された意見を事務局が取りまとめ、それを地区部会長が確認した後、中南地区の意見として第１分科会（第５回）で豊島委員から報告する旨の発言が地区部会長からなされた。

３　閉会